

# 秘められた絵図

## 『夕霧花園』と『不即不離』が描く日本軍とマラヤ共産党

山本 博之

国どうしや民族どうしが敵味方に分かれて対立する戦争と異なり、新型コロナウイルス感染症の流行は人類社会全体の危機である。実際には、感染症流行下での暮らしは国や地域、さらに年齢層や職種などによって異なり、一人ひとりが受ける影響はさまざまに異なっているが、それらが「コロナ禍」という言葉でまとめられて理解されている。

同様に、戦争や大規模災害のように国全体に影響が及ぶできごとはしばしば「国家的悲劇」、「国民的悲劇」と呼ばれる。国民的悲劇も国家的悲劇も「国」の枠が強く意識された表現で、場合によっては「民族的悲劇」の方が実情に合っていると思われることもあるだろう。

ただし、ここで問いたいのは国と民族のどちらなのかということではない。影響の度合いが人によって異なるにもかかわらず、それが国や民族の被害として集合的に記憶され、語られる裏で、個人の記憶はどのように記憶され、語られるのかということである。

本稿が取り上げるのは、マレーシア（マラヤ）を舞台にした第二次世界大戦中の日本軍による占領統治およびその前後の時期のマラヤ共産党による武装闘争を描いた作品である。

『夕霧花園』は、マレーシアの連邦裁判所判事という高いキャリアを目指す華人女性が1986年の現在から振り返る形で、日本軍に妹を殺された憎しみを抱きながら日本人庭師とともに過ごした30年前の日々を回想する物語である。

『不即不離——マラヤ共産党員だった祖父の思い出』（以下、『不即不離』）は、マレーシア出身で主に台湾を拠点に活動するラウ・ケクファット監督によるドキュメンタリーで、ラウ監督の実際の家族を題材として、マレーシア（マラヤ）の独立の歴史、そしてアジアの現代史について、これまで公式にほとんど語られてこなかった側面を描いている。

どちらの作品も日本軍とマラヤ共産党が登場するが、マラヤ共産党の描かれ方が対照的であり、合わせて観ることで深掘りのしがいが増す作品である。以下では、マレーシア（マラヤ）の現代史を振り返りながら日本軍およびマラヤ共産党について簡単に整理した上で、『夕霧花園』、『不即不離』の順に作品のあらすじ紹介と内容の検討を行い、最後にこの2つの作品をさらに別の角度から深掘りしてみたい。物語の結末と核心部分、さらに筆者なりの解釈を記していることをあらかじめお断りしておく。

### 1. 「国家の敵」としてのマラヤ共産党

マレーシアは、マラヤ連邦（1957年8月独立）とボルネオ島のサラワクとサバ（ともに1963年8月独立）という3つの旧イギリス領があわさって1963年9月に結成された連邦国家である<sup>1)</sup>。『夕霧花園』と『不即不離』はどちらもマラヤが物語の舞台である。

マラヤ共産党は、南洋共産党を前身として、イギリス統治下のマラヤで1930年に結成された。マラヤの解放を掲げて植民地統治に反対し、幹部たちは植民地政府に逮捕された。

1941年12月8日、真珠湾攻撃に2時間先立ち、日本軍がマラヤの北東部のコタバルに上陸した。日本軍はマラヤを南下してシンガポールに至り、翌年2月15日にイギリス軍が降伏すると、マラヤ全域で日本軍による占領統治が始まった。地元住民は日本の圧政に苦しみ、抗日運動に身を投じる人たちも現れた。イギリスはマラヤ共産党の幹部を解放し、マラヤ共産党はマラヤ人民抗日軍を組織してイギリス軍と協力して抗日ゲリラ戦を戦った。

1945年8月に日本の敗戦によって戦争が終わると、イギリスはマラヤの植民地統治を復活させた。イギ

1) このときシンガポールもマレーシア結成に加わったが、1965年8月に分離独立して単独の国家になった。

リス支配のもとで秩序回復と戦災からの復興を遂げようとする人たちもいたが、戦争中に抗日運動を行っていた人びとは、イギリス支配に対する抵抗運動を行うことでマラヤ解放の戦いを継続した。植民地政府は1948年にマラヤ全土に非常事態宣言を発令して共産主義ゲリラの掃討作戦を展開した。

マラヤ共産党には華人が多かったのに対し、イギリス植民地政府のもとでマラヤ共産党との戦闘の frontline に立った軍や警察にはマレー人が多かった。そのため、共産主義ゲリラと植民地政府の対立は、戦闘の現場では華人とマレー人の対立という形で現れることも多かった。

マラヤは1957年8月にイギリスから独立した。植民地統治のもとで各州の名目上の統治者だった王族が中心になって組織した政府にイギリスが独立を与えるという形で独立したため、独立後の政府は植民地政府の継承であると見る人たちもいた。マラヤ共産党はマラヤの真の解放を求めてマラヤ独立後も武装闘争を継続した。

非常事態はマラヤ独立後の1960年まで続いた。この間にマラヤ共産党は植民地政府によって非合法化され、独立後はマラヤ連邦政府によって非合法組織とされた。1963年にマレーシアが結成された後も、マレーシア政府はマラヤ共産党を非合法組織とした。

マレーシア政府とマラヤ共産党は1989年12月に和平協定を結んだ。しかし、マレーシアでは現在でも公の場でマラヤ共産党が肯定的に語られることはない。マラヤを独立に導いた功績はイギリスとの交渉にあたったアブドゥル・ラーマンを筆頭とする王族の政治家たちにあり、マラヤ共産党は王室の解体を要求して破壊活動を行った国家の敵であるというのが公式見解である。

これに対して、マラヤ共産党はマラヤの解放のために戦ったのであり、マラヤ共産党対策に手を焼いたイギリスがマラヤへの独立付与を早めたのであって、マラヤ共産党の武装闘争がなければ独立はもっと後になっていただろうという見方から、マラヤ共産党を「自由のための闘士」と呼ぶ人々も存在する。ただし、その見解が表立って表明されるたびに社会から強烈な批判が浴びせられ、否定されてきた。

映画を例に取れば、マラヤ共産党の残虐さとそれに対峙する警察の勇敢さを強調した『ブキット・クボ

ン』<sup>2)</sup>は劇場公開されて人気になり、現在でもマレーシアの学校で上映されているが、『最後の共産主義者』<sup>3)</sup>や『新村』<sup>4)</sup>のようにマラヤ共産党の肯定的な側面も描いた作品はマレーシアで上映が認められていない。『不即不離』も、非公開の上映会を除けばマレーシアでは上映されていない。

## 2. 『夕霧花園』

### ——努力の積み重ねと時がもたらす赦し

#### (1) あらすじ

『夕霧花園』の物語は、劇中でラジオ・ニュースが示すように、1945年（戦争末期）、1951年（終戦直後）、1986年（劇中での現在）の3つの時間の間を行き来しながら語られる。

**1986年** 見渡す限り緑の茶畑が広がるキャメロン高原の山道を、ユンリンが運転するベンツが走っている。車のラジオからユンリンについてのニュースが流れる。ユンリンはマレーシアの連邦裁判所の判事候補に名前が挙がっているが、元皇室庭師でキャメロン高原に住んでいた中村有朋とかつて交友関係があり、有朋に日本軍のスパイだった嫌疑が浮上したことで、ユンリンの連邦裁判事としての適性が問われている。

丘の上の屋敷に着いたユンリンは35年ぶりにフレデリックに再会し、妻のアンを紹介される。ユンリンがフレデリックを訪ねた直接の理由は、フレデリックの亡き父マグナスが残した書類の中に有朋についての情報がないかと期待してのことだったが、有益な情報は見つからなかった。ただしユンリンがキャメロン高原を訪れたのは、戦争中に亡くなった妹ユンホンの情報を探るためでもあった。ユンリンは戦犯法廷事務所で働いていたときのことを回想する。

**1951年** ユンリンは日本軍の元高官で死刑執行直前の小林守に面会し、妹が収容されていた収容所の場所を聞き出そうとする。しかし小林は、修道院で出会った男がその収容所を「金のユリ」と呼んでいたことしか知らず、場所は知らないと言う。ユンリンは小林の絞首刑を見届ける。戦犯法廷事務所のラジオから、共産ゲリラによる攻撃によってマレー連隊の兵

2) 原題Bukit Kepong、ジンス・シャムスディン監督、1981年。

3) 原題Lelaki Komunis Terakhir、英題The Last Communist、アミール・ムハンマド監督、2006年。

4) 英題The New Village、ウォン・キウリット監督、2013年。

士が死傷したニュースが流れる。

ユンリンは有朋に会うためにバスでキャメロン高原に向かう。検問で共産主義ゲリラの疑いをかけられるが、迎えに来たマグナスに助けられる。マグナスの車で丘の上にある屋敷に着くと、マグナスの妻エミリーと息子フレドリックを紹介される。

ユンリンは屋敷から離れた山小屋に泊めてもらう。ユンリンの背中には戦争中に拷問を受けた傷あとが残っており、ユンリンは妹のことを思い出す。日本の庭園を造るのが夢だと言っていた妹は、戦争中、掘立小屋の慰安所に入れられて日本兵に強姦されていた。

翌朝、ユンリンは有朋の家を訪ねる。有朋は夕霧花園と名付けた日本庭園を造っていた。有朋と面会したユンリンは、祖母の遺産の土地に日本庭園を造ってほしいと依頼し、妹の話をする。ユンリンの妹は京都の天龍寺の庭園に感動して造園を学んだが、戦争になり19歳のときに強制連行されて山奥の収容所に入れられ、日本が降伏した日に証拠隠滅のために収容所が爆破されて生き埋めになった。妹の亡骸を探すために収容所を探し続けたが見つからず、せめて妹のために日本庭園を造りたいと思っていると話す。ユンリンは夕霧花園を手伝って庭園造りを学ぶことになり、翌日から、有朋の気まぐれのような指図に従って5人の作業員と一緒に大きな石を庭に置いては移す作業を繰り返す。

ラジオ・ニュースで、高等弁務官のガーニー卿が共産ゲリラに殺害され、イギリス軍による報復攻撃のために夜間外出禁止が発令されたことが知らされる。庭園の仕事が休みの日、ユンリンとフレドリックがカフェでコーヒーを飲んでいる。フレドリックは日本軍が終戦後に運び出すつもりでマラヤの山中に隠したままになっている財宝の噂の話をする。共産主義ゲリラ掃討のためといってイギリス軍が民間人を山に寄せ付けないのは財宝を独占するためだと疑い、マグナスは財宝を探しに仲間たちと毎週山に出かけていると話す。混みあったカフェの隣のテーブルでは有朋の使用人のアチョンが2人の話に聞き耳を立てている。

夜、ユンリンが山小屋に戻ると、勝手に部屋に入った共産主義ゲリラの男たちがユンリンの食べ物を食べている。リーダー格の男はアチョンの弟で、アチョンがユンリンの情報を漏らしていた。男たちは、日本

の占領が終わったと思えばイギリス支配がはじまり、いつになれば平等な社会が実現するのかと不満を盛らす。高等弁務官を殺すつもりはなかったのに「ボス」のせいで殺すことになり、自分たちは山奥に潜伏するしかなく食べ物にも事欠く有様なのに、「ボス」は王様気取りで出世までしたと文句を言い、「ボス」を金で売るのでイギリス政府の高官を紹介するようにユンリンに求める。言葉では平等な社会の実現と言いつつ実際は金目当てではないかとユンリンが皮肉を言うと、男はユンリンを平手打ちするが、ユンリンは毅然として「過去に比べたら何でもない」と言い、男たちは山小屋から立ち去る。

**1986年** ユンリンが有朋の家を訪れる。主人がいなくなった家は、障子や廊下は古くなっているが、今でも掃除が行き届いている。ユンリンは書斎で有朋のパスポートと宮内庁からの手紙を見つけ、有朋が1937年にマラヤに入国してから出国していないこと、宮内庁からの帰国命令を有朋が拒否したことを知る。有朋の家の管理をしてきたアチョンは、数年前に尼僧が有朋を訪ねてきたことを伝える。戦争中に強制連行されて慰安所に入れられたときに有朋に救い出され、そのことへの感謝を伝えに来たと言う。フレドリックはそれが本当なら有朋は日本に逆らったことの傍証になると言うが、ユンリンは有朋が日本のスパイだったかどうかよりも、なぜ有朋と自分があのような別れをしなければならなかったかを知りたいという思いが強くなっている。

**1951年** ユンリンはフレドリックから自分への想いを打ち明けられ、夕霧花園の仕事辞めて自分のそばにいてほしいと求められるが、ユンリンはその求めを断り、有朋と過ごす時間がますます増えていた。ユンリンが収容所の話をする、有朋は自分にも責任があると言いつつ、ユンリンに収容所の話をするよう求める。

**1945年** ユンリンの回想。目隠しされた女たちが連行されて山道を歩き、収容所に入れられる。若い女たちが一列に並べられ、日本兵が品定めして連れていく。ユンリンの妹も連れていかれ、掘立小屋の慰安所で来る日も来る日も日本兵に犯されるが、ユンリンには助けることができない<sup>5)</sup>。ユンリンは日本兵の

5) 順番待ちしている日本兵たちの2番目にいるのは映画監督のホー・ユンハン。

食べ物を盗んで妹に渡すが、盗みが発覚して妹の前で日本兵に拷問され、背中が鞭の傷あとだらけになる<sup>6)</sup>。日本の降伏の日、収容者たちは地下坑に入るように日本兵に命じられる。他の収容者たちと一緒に地下坑に向かっていた妹は、1人だけ逃げ出すことができたユンリンに気づき、無言のまま「逃げて」と口を動かす。妹たちに背を向けて1人で逃げ出したユンリンは、途中で思い直して引き返すが、地下坑はユンリンの目の前で爆破され、収容者たちは生き埋めになった。

**1951年** 季節風になったために数か月は庭園の仕事ができなくなる。有朋はユンリンの背中に刺青を入れたいと言う。外で雨が続く中、書斎で有朋がユンリンに刺青を入れる日が続く。妹のことを想うときに何を思い浮かべるか尋ねられたユンリンが「桜の花」と答えると、有朋はユンリンの背中に桜の花を彫る。

雨が上がり、ユンリンの背中に刺青が入っている。右下に何か所、刺青が入っていない四角い空白がある。刺青は完成したのかと尋ねるユンリンに、空白を残しているのは人生に完結はないということだと有朋が答える。

朝霧の中、共産主義ゲリラが有朋の家を襲い、有朋とユンリンはマグナスの屋敷に連行される。屋敷では男たちがマグナスとエミリーを縛り上げて床に座らせ、屋敷の食料や宝石を奪っていた。男たちは有朋とユンリンも一緒に座らせ、銃で脅しながら有朋に日本軍の財宝のありかを言うように命じる。有朋が財宝は存在しないと答え、緊張感が走る中、銃を向けられたエミリーをかばおうとしたマグナスが銃弾を受ける。男たちが屋敷から撤収し、フレドリックが駆け付けるが、マグナスは事切れていた。

**1986年** アクションに連絡先を聞いて尼僧と電話で話したユンリンは、有朋が修道院に金を渡して慰安所から少女たちを助け出していたことを知る。ユンリンは小林守から修道院の話を知っていたことを思い出す。ユンリンの妹がいた収容所は「金のユリ」と呼ばれており、小林は修道院で会った男にそのことを聞いたと言っていた。自分と妹がいた収容所には財宝が隠されていて、小林が会った男は有朋のことで、有朋は日本軍の財宝の管理のためにマラヤに派遣さ

れたと考えるとすべて辻褃が合う。

ユンリンが夕霧花園を訪れると、庭の草が伸びており、4つを除いて他の石はどれも草に隠れていた。まわりの風景と合わせることで庭が完成するという有朋の言葉を思い出し、屋敷に戻ってキャメロン高原の地図を見て、収容所があった位置を知る。それは35年前に有朋がユンリンに示していたもので、35年の時を経たことでユンリンに伝わった。

翌日、朝食を終えたユンリンに、一緒に財宝探しに行こうとフレドリックが誘いに来る。しかしユンリンは、妹がいる場所がわかっただけで今は十分だと言う。ユンリンは連邦裁判所の判事になるため批判をはねのける決意を固めた。小林守から託された日本の家族宛ての手紙をフレドリックに託して投函を頼み、1人で夕霧花園に向かい、35年前の有朋との別れを受け止める。

### 「平手打ち」に込められたマラヤ共産党批判<sup>7)</sup>

『夕霧花園』はフィクションだが、多くの場面で史実がそのまま語られており、その中にフィクションが織り込まれている。

日本軍はシンガポールで「抗日分子の粛清」として数万人の華人を虐殺し、さらにマラヤ各地でも華人を虐殺した。マラヤ各地に慰安所を設け、華人やイギリス人の邸宅を接収して慰安所にしたほか、ニッパ椰子で葺いた小屋を建てて慰安所にした。礼拝堂が慰安所にされたところもあった<sup>8)</sup>。

劇中のラジオ・ニュースで報じられるのは実際に起こった事件である。「グアムサン地区で共産ゲリラによる攻撃があり、マレー連隊の兵士17人が死亡、8人が負傷した」というのは、1951年3月25日にスムル川でマレー連隊と共産主義ゲリラが遭遇して銃撃戦になり、マレー連隊は17人が死亡し、共産主義ゲリラは29人が死亡したことを報じたものである。「高等弁務官のガーニー卿が共産ゲリラに殺害された」というのは、1951年10月6日、クアラルンプール近郊の路上で在マラヤ英国高等弁務官のヘンリー・ガーニーがマラヤ共産党によって暗殺されたことを指している。

ユンリンの小屋に押し入ったマラヤ共産党の男た

7) この節は[山本 2021]を再構成したものである。

8) マラヤにおける日本軍の慰安所については[林 1993]を参照。

6) 拷問した日本兵を演じているのは前述のホー・ユーハン。

ちが、高等弁務官を殺すつもりはなかったのに「ボス」のせいで殺すことになり、自分たちは山奥に潜伏するしかなく食べ物にも事欠く有様なのに、「ボス」は王様気取りで出世までしたと不満を言っている。名指しは避けているがチンペンを指していることは明らかである。1939年にマラヤ共産党の書記長になったライテクはイギリスと日本の二重スパイで、日本降伏直後に武装闘争の停止を命じた。チンペンはライテクに疑いを抱き、ライテクの裏切り行為を究明した。ライテクは1947年3月に失踪し、同年末にバンコクで殺害された。チンペンは1947年3月に書記長に就任し、マラヤ共産党は1948年に武装闘争路線に転換した。

植民地政府は1948年にマラヤ全土に非常事態を敷き、マレー連隊を組織してマラヤ共産党の討伐に乗り出した。植民地政府は華人がマラヤ共産党にシンパシーを抱いていると考え、華人を強制移住させてマラヤ共産党への食料補給を断つ作戦を取った。ゲリラ作戦本部長になったブリッグス将軍はマラヤの山地に住む住民を新村に移住させるブリッグス計画を実施し、1951年までに42万3,000人を移住させて共産ゲリラの補給路を断った。マラヤ共産党は活動の拠点を山中に移した。ユンリンが有朋のもとで庭園造りを学んだのはこの頃である。

『夕霧花園』では、マラヤ共産党は暴力によって一般市民から食料や金品を奪う存在で、日本軍と同列の悪者として描かれている。

ユンリンがマラヤ共産党の男の脅しに屈することなく口答えすると、マラヤ共産党の男に平手打ちされる。どれだけ相手に怒りを抱いても手を出さずに言葉で言い負かすべきという考え方が強いマレーシアでは、平手打ちは相手の人間性を認めない野蛮な行為と考えられており、戦争中に日本兵がしばしば平手打ちを行ったことは今でもマレーシアの人々の間で記憶されている。ここでは共産主義ゲリラがユンリンを平手打ちすることで、言葉では平等な社会の実現ときれいごとを言っているが、実際の行動が野蛮だったという点でマラヤ共産党は日本軍と同類であるという批判が込められている。さらに、平手打ちされたユンリンが毅然として「過去に比べたら何でもない」と言ったことは、マラヤ共産党を戦争中の日本軍と同類だとするとともに、マラヤ共産党の男

が自分の力の源泉だと思っている野蛮さにおいてマラヤ共産党は日本軍に劣っているという評価を与えている。

### 「山下財宝」というエピソードの仕掛け

『夕霧花園』には史実にフィクションがうまく織り込まれている。その最たるものが日本の隠し財宝である。東南アジアには、日本軍の莫大な財宝が敗戦のために今も現地に残されたままになっているという噂があり、山下奉文大将の名にちなんで山下財宝として知られている。

山下財宝の噂が最も広く信じられているのはフィリピンのようなが、マレーシアでも山下財宝の噂は知られている。ただし、日常的にはすっかり忘れられていて、何かのきっかけがあると時折り話題に上る程度である。

ところが1999年にアメリカのノンフィクション作家スターリング・シーグレーヴが『ヤマト王朝——天皇家の隠れた歴史』を出版し、その内容が史実と噂をうまく織り交ぜたものだったことから、日本の隠し財宝の噂が再び人々の話題に上るようになった。もともとの噂では日本軍が占領地で押収した財宝だったが、『ヤマト王朝』では財宝は日本の皇室の所有物で「金のユリ」と呼ばれているとされた。日本の事情を知る読者の目には明らかな記述の矛盾があってフィクションだとわかるが、日本の事情に通じていない読者には事実と噂の区別がつきにくく、財宝の噂に新たな尾ひれがつくことになった。劇中で、自分と妹が入れられていた収容所が「金のユリ」と呼ばれていたことを聞かされたユンリンは、風流な名前だと思ったのではなく、日本の埋蔵金との関わりを感じたということになる。

ユンリンと妹が入れられていた収容所は「金のユリ」の隠し場所で、有朋はその管理人として皇室から派遣されていたと考えるといろいろなことに辻褄があう。有朋が1937年にマラヤに入国したというのは、日本が南京で奪った資産を日本に持ち帰る途中にマラヤに運び、それに有朋が立ち会った可能性を思わせる。皇室の庭師だったけれど庭にテニスコートを作るのを断ったために仕事を失ったというとはけた説明は、まじめに受け止めれば有朋の常人離れた性格を示すエピソードとなるが、財宝の管理という

極秘任務を隠すための表向きの理由であるようにも思えてくる。戦後、有朋を訪ねてきた日本人<sup>9)</sup>が宮内庁からの手紙を渡して有朋に帰国を促したことは、「金のユリ」の情報を持ち帰るようという皇室からの指示ではないのか。ユンリンの有朋への想いが増す一方で、有朋が妹の死に関わっていたのではないかという疑いも増していく。

もし有朋が「金のユリ」を管理していたとすると、戦争中に有朋が慰安所の女性たちを解放したのはその金を使ったということになる。そのことだけを見れば、有朋は正義の人にも見える。しかし、「金のユリ」に関わっていた以上、有朋は慰安所を含む占領統治の体制側の存在であり、たとえ直接には手を下していなかったとしても日本による占領統治の一翼を担っていたことになる。有朋がユンリンに教えたように、庭の石や木はそれだけで存在するのではなく、まわりの景色の中に置かれることで意味を持つ。個人が局所的な正義を貫こうとしても、戦争という状況の中では戦争遂行の責任から逃れることができない。有朋はユンリンの問いかけに否定せず、「日本では第一に国に忠誠を尽くす」と言うだけだった。

### 観る者をも景として取り込み意味を成す作品

ユンリンは小林から託された手紙を投函せずに持ち歩いていた。ユンリンが森の中で落とした小林の手紙を拾ったことで、おそらく有朋はユンリンの妹が「金のユリ」の犠牲者だったことを知り、そのためユンリンに庭園造りを手伝わせることにしたのだろう。想像を逞しくすれば、有朋は「金のユリ」の収容所の管理を任されていたものの、日本軍の統治によって現地の人々が苦しむことは心苦しいと考えており、少女を慰安所から解放するなどの身近な状況の改善に心を砕いていたのだろう。収容所が爆破されて現地の人々が生き埋めになったことにも良心の呵責を感じており、せめてその亡骸を家族に再会させてあげたいと考えていた。ただし、妹がいた収容所についての情報をユンリンに与えれば、自分と「金のユリ」の関わりを明らかにすることになる。有朋にできることは、収容所のありかを形を変えてユンリンに託し、ときが満ちたときにユンリンがその情報を見つ

けることができるようにすることだった。

有朋がユンリンに託した収容所の情報は、35年の時を経てユンリンのもとに届いた。ユンリンは有朋や他の日本人が戦争中に行ったことを受け止められるようになっていた。もっとも、ただ時が経てば過去を忘れて赦したりできるということではない。ユンリンと有朋と一緒に大きな石をいくつも動かすことで夕霧花園を完成させたことに象徴されるように、大変な努力を重ねた上で、さらに時が経つことで受け入れられることがある。

ユンリンが妹の居場所を知るきっかけになったのは、有朋がユンリンに教えた借景だった。庭の石や木はそれだけで景観が完成するのではなく、フレームの中に収めて、背景の景色などを含めることで意味を持つ。この考えに倣うならば、『夕霧花園』もまた戦争の経験を人の世の中に置いて意味を与えるものであり、それを観る私たちもこの作品を形作る背景の一部をなしていると言える。ユンリンが借景を理解して過去を受け入れたのは1986年のことで、1951年に有朋と別れてから35年経った後だった。そこからさらに35年の時を経た今日、私たちはこの作品にどのような意味を見出し、どのような意味を与えるのだろうか。

## 3. 『不即不離』——

### マラヤ共産党員の祖父と父・家族をめぐる物語

#### あらすじ

マレーシア出身で台湾を活動の拠点とするラウ・ケクファット監督は家族写真を1枚しか持っていない。しかも写真の中の父は心ここにあらずといった表情をしている。表情だけでなく、父と母はまるでアリとキリギリスで、母は家族のために必死に働き、父は家庭のことを顧みずに暮らしていた。

ラウ監督は外国の大学に留学し、卒業するとそのままその地で働き始めた。家を離れて9年間、父とは電話で話をするすらなかった。なぜ自分の家族だけ父が疎遠なのかを考えているうちに、父の父がどんな人だったのかに思いが向いた。

父の家族写真を探してみると、父たち4人のきょうだい（2人の兄、姉、父）とその母（ラウ監督の祖母）の5人の写真しかなく、父の父（ラウ監督の祖父）

9) 有朋に渡された名刺には「一般社団法人海外戦士捜査協会 部長 関川久人」と書かれていた。

が写っていない<sup>10)</sup>。祖父はどこに行ったのかを知るため、ラウ監督はビデオカメラを持ってマレーシアに帰省し、家族・親戚たちに祖父の話を探ねていった。

ジョホール州ジョホールバルの実家で祖父について尋ねると、父は「何一つ覚えてない」と言い、マラヤ共産党員で自分が小さい頃に射殺されたとしか聞いていないと答えた。学校の教科書にはマラヤ共産党はテロ活動を行ってマラヤに非常事態を招いたと書かれている。祖父はテロリストだったのか。テロリストだから祖国を捨てて家族も捨てたのか。

ラウ監督は父と一緒にペラ州シティアワンにある父の実家に向かう。実家にはおば(父の姉)が住んでいて、祖父の肖像を出して見せてくれる。ラウ監督は新年や節句のたびにこの絵に手を合わせるようにと言われて育ったが、それが祖父だったとはじめて知った。

亡くなった祖母は、共産党に入って家族を捨てた祖父にとっても怒っていたという。祖父は29歳で殺され、20代だった祖母は1人で4人の子を育てた。

父が家庭を顧みない無責任な父親なのはなぜなのか。この関心から祖父のことを調べたラウ監督は、祖父もまた家族を顧みない無責任な父親だったと知り、さらにその理由がマラヤ共産党に入ったためだと聞かされ、マラヤ共産党について知るため、外国で暮らしているマラヤ共産党の元党員たちを訪ねる。

中国・広州で会ったのは元マラヤ共産党員の張平と夫の謝有雲。1937年に盧溝橋事件が起こると、張平たちが住んでいたペラ州タイピンにも抗日運動が及んできた。11歳だった張平は、なぜ日本が祖国・中国を侵略するのかと怒りに燃えて抗日合唱団に参加し、日本製品の不買運動に加わった。ただし、抗日運動に参加したのは一族の中でただ一人中国語教育を受けた張平だけで、家族・親戚はみな英語教育を受けており抗日活動には積極的でなかった。

マレーシアで生まれ育ってマレーシアを祖国と考えるラウ監督は、張平が中国を祖国と考えていることについて、当時は華人がマラヤで生まれ育ってもマラヤの市民権が与えられなかったため、中国から遠く離れていても中国人を名乗り、中国に関心を向け、中国語を学んだのだと理解する。

10) 本稿では原則としてラウ監督との関係で「祖母」、「祖父」と記す。

別のマラヤ共産党員の曾珍。彼女も合唱団による抗日募金運動に加わり、籠を背負って街に出て、愛国の歌を歌いながら花を売った。学校でも「列強を倒せ」、「中国を救え」と歌ったが、イギリスはその歌を禁じ、学校でその歌を歌うと先生は逮捕され、生徒は鞭で打たれた。イギリス人が中国人やインド人を見下しているのを見て子どもながらに帝国主義が何かを理解し、同じ人間どうしなのに扱いが違うのは不公平だと憤ってマラヤ共産党の戦いに参加した。

1941年12月7日の真珠湾攻撃と同じ日<sup>11)</sup>、日本はマラヤにも侵攻した。日本軍は抗日運動への報復として華人を虐殺し、シンガポールの「華僑粛清」では15万人が殺された。日本による占領は、皮肉にも、民族ごとに分かれていたマラヤの人々が民族の違いを超えて経験した共通の試練になった。

マラヤ共産党の抗日隊員だった葉瑞清。子どもの頃の夢は教師になることで、もし革命に参加していなかったら今頃は教師になっていたかもしれない。ただし自らの理想のために革命に参加したのであって、自分の人生のことは誰も恨んでいないという。

日本の侵攻以前、イギリスはマラヤを支配してマラヤ共産党を弾圧していた。日本の侵攻で敗走したイギリスに対し、マラヤ共産党は、仲間を釈放すればイギリスとともに日本と戦うと持ち掛けた。イギリスは迷った末にマラヤ共産党員を釈放して抗日活動に送り出したが、自分たちに刃向かうかもしれないとマラヤ共産党を信用せず、軍用の銃は渡さなかった。マラヤ共産党員は自作した爆弾などで日本軍と戦った。

タイ国ベトンで会ったマラヤ共産党の元隊員の彭一凡と張勝美。1942年9月1日にマラヤ共産党の抗日集会が日本軍に包囲され、突破口を開こうとして犠牲になった18人の勇士の功績を伝えるために九月一日殉死者記念碑が建てられた。後に9月1日は独立のために戦って犠牲になったすべての人を追悼する日になった。

ただしマレーシアではマラヤ共産党の功績を讃える記念碑は受け入れられず、反対者によって粉々に砕かれた。その破片を拾い集めて復元した記念碑が建てられた。警察が記念碑について事情を聞きに来たことがあるが、マラヤの人民のために命を犠牲に

11) 日本時間では12月8日だが現地時間では12月7日。

した正義感に敬意を払う社会正義の記念碑だと答えたという。

山中で斃れた戦友たちの遺体は死んだ場所に埋めるしかなかった。和平合意の後に遺骨探しをして何かは見つけたけれど、多くは見つからないままになっている。でも緑深い山中で安眠しているから探さなくていいのだと、自分たちに言い聞かせるように言う。

マラヤ共産党の元隊員でマレー人のアワン・ヤクブ。隊員たちが歌っていたマレー語の歌を今でも覚えている。マラヤ共産党員は華人が多く、中国の抗日運動に参加していたため、マラヤ共産党は華人の組織だと見られがちだが、マラヤの解放を掲げて戦っていたマラヤ共産党には華人以外の党員もいた。

ラウ監督の祖父は、家に帰ったところを通報され、駆け付けた警察に射殺された。警察は祖父の遺体をまるで動物の死体を扱うかのように運んでいった。しかし祖母も家族も、祖父が殺されても涙も流さずに他人のふりを通した。殺されたのが自分の家族だと知られたら一族すべて逮捕されることになりかねない。写真を含め、祖父との関係を示すものはすべて捨てた。

祖父母の実家付近はゴム園が広がっていた。マラヤ共産党の活動が活発な地域で、警察がマラヤ共産党員や関係者を探しに来た。マラヤ国民の身分証を持っていればよいが、身分証を持っていないか、持っていないでも名前がマラヤ共産党員として逮捕者リストに載っているかすれば、警察に捕まれば家族ごと中国に追放された。

教師になるのが夢だった葉瑞清は、警察に捕まって死刑判決を受けた。マラヤ独立のために戦ったのに、マラヤ政府は自分をテロリストとして扱った。20年間服役した後に釈放され、中国に追放された。1948年の非常事態によって多くの華人が追放され、1950年からマラヤ独立の1957年までの間に38回にわたって2～3万人が中国に送還された。

中国・広東華僑博物館長の王明恵の両親も中国に追放されたマラヤ華人だった。マラヤの家族や親戚は中国に「帰国」した人たちの生活支援のために送金したが、そのために多くの帰国華人が外国のスパイと疑われて迫害を受けた。王明恵の両親もスパイの嫌疑をかけられて収容所に入れられた。男性の収容者は大勢いたが、女性の収容者は1人だけだった。収容された翌日、12歳の王明恵と6歳の妹が食事を届け

に行くと、母は自殺していた。出棺は家族だけで行ったが、両親がまわりの人たちによくしていたため、沿道には人々がびっしりと集まって母の出棺を見送ってくれたという。

曾珍は娘を出産した直後に中国送還になった。いつ死ぬかもしれないと覚悟していた曾珍は、生後3か月の娘を中国に連れていか迷った末、手放すことを決断した。45年後に娘に会う機会があったが、娘は曾珍の方を見ようとしなかった。生みの親に対するひどい態度だが、曾珍は幼い娘を捨てた自分が犯した罪の報いであって、娘は悪くないと言う。

ラウ監督の祖父も、マラヤ解放の夢に一切を賭けて、家族を含めてすべてのものを犠牲にした1人だった。祖父はマラヤの解放を夢見て戦ったまま死んでいった。それでは幼い頃に父を亡くしたラウ監督の父はいったいどの土地の夢を見ればよいのかとラウ監督は問いかける。

ラウ監督の父は、祖父のことは覚えていないが、祖母のことはよく覚えている。祖母は毎朝3時に起きて煮炊きをして、自転車で1時間かけてゴム園にゴム採りの仕事に行き、昼からは草むしりの仕事をして、夕方7時に夕食をとり、8時にランプを消して寝た。厳しかったけれど、歌を教えてくれるやさしい祖母だった。

祖母が仕事に行っている間、父は1人で林の中や水路で遊んでいた。昼間は近所の映画館に行って、大人が来たら実の子のように手をつないで一緒にしてもらって映画を観た。おばの話では、父が近所の子どもたちに虐められてゴム園の中を逃げて行って迷子になり、運よく親切な人に家に送り届けてもらったこともある。

マラヤ共産党員の子には親と別れて人生を送った人も少なくない。マレーシアにある実家は当局が監視の目を光らせていた。赤ちゃんが生まれてもジャングルでは育てられないが、実家に送れば当局の知るところになり、ゲリラの子として当局に連れ去られた。そのため赤ちゃんを安全な家庭に養子に出すこともしばしばあった。

マラヤ共産党の元隊員の一凡と懐陽は、1976年に息子が生まれたが、戦争中だったため自分たちで育てることができず、生後2、3日でタイ人の家に養子に出さざるを得なかった。1989年にマラヤ共産党と



マレーシア政府が和平合意を結んだ後、養父母が招いてくれて息子と再会した。しかし一凡と懐陽はタイ語がわからないために息子と話をすることができず、養父母は自分たちの子として育てていきたいと言い、そうすることにした。夫婦仲が良い2人は、自分たちは生涯を革命に捧げたので、ラウ監督のような今日のマレーシアの若者たちを自分たちの子のように見ていると言う。

中国・広州で、79歳から88歳の女性たちが中華料理の丸テーブルを囲んでいる。1人はマラヤのペナン生まれ。戦争中に兄が抗日戦争のために中国に行っている間に実家の家具屋は爆撃と戦車によって押しつぶされ、商品は略奪された。戦争が終わって兄がペナンに戻ってきて、これで平穏に暮らせると安堵したのも束の間、兄は命令を受けて再び中国に赴いた。国共内戦中で、兄は共産党に捕まった。在外華人で学生だった兄は、中国に残りたければ解放軍に入れ、それが嫌なら中国から去れと言われ、自分の敵は日本人で、中国人の同胞とは戦えないと言ってマラヤに戻った。

王明恵の両親は戦友たちと親密で、戦友たちが訪ねてくるとマレーシアを懐かしんでカレーを作って食べたという。王明恵の父はマレーシアに帰りたいたずっと願っていたが、ついになかなかた。

張平は、古い先は長くないし誰も自分を訪ねてこないけれど、昼は中国にいても夜はマレーシアにいるという。夢に見るのはマレーシアだけで、夢の中ではいつもマレーシアにいる。

ラウ監督の父は、祖母の最期の日々に辛そうにしていた。祖母が自分で歩けなくなると、父は祖母を抱きかかえて毎日祖母の体を洗った。祖母は一晩中痛みを訴え、医者は余命3、4か月だと言ったが、気力で7か月生きた。祖母が夢に出たために孫娘が仕事を休んで祖母の家に駆け付けると、祖母は隣に祖父が寝ているように感じるので体をさすってあげてと言った。祖父が亡くなってからはじめて祖父のことを口にした翌日、祖母は息を引き取った。

タイで行われたマラヤ共産党の同志会。さまざまな民族のいろいろな人が集まり、歌に合わせて盆踊りのように踊っている。

シティアワンのラウ監督の祖父母の実家のそばのゴム園の中を歩く父。自分が生まれたのはゴム園の

森の中だったけれど、このあたりはすっかり変わってしまって、自分がどこにいるのかわからないほどだと言う。

## 国を愛する方法は人それぞれでよい

『不即不離』の物語の中心は、形の上ではラウ監督の祖父だが、映画で一番多く描かれているのはラウ監督の父である。映画の冒頭で、ラウ監督は父との間に9年間も音信がなかったと言い、それは上映時間が1時間24分のこの映画では2分間にあたる時間だと言う。それに対して、ラウ監督の父が家の外で椅子に座ってカメラ越しにラウ監督と話をしている場面が5回に分けて映され、話している時間はあわせて4分33秒ある。カメラがまわっていないところでも話をしただろうし、ジョホールバルの家からシティアワンの実家まで車で6～7時間かかる間も車内で話をしただろうから、この映画制作はラウ監督が個人的なことを含めて久しぶりに父親とじっくり話す機会になったはずだ。

この映画でラウ監督の父はどのように描かれているのか。印象的なエピソードを紹介しよう。

父が子どもの頃、近所の悪ガキたちにいじめられてゴム園の中を泣きながら走って逃げたという話がある。幼かった父にとって、ゴム園とは祖母(父の母)が毎朝仕事に行く場所だった。いわば、ゴム園はラウ監督の父にとって母親の象徴のようなものだったのだろう。1人ぼっちの父がゴム園の中を泣きながら走っていったのは、母親の懐に飛び込もうとする気持ちの表われだったのではないだろうか。

ラウ監督の父の祖父に対する気持ちはどうだったのか。監督の父は祖父の記憶は全くないと言い、父親が欲しかったかと尋ねられても答えをはぐらかす。しかし、見知らぬ大人にお願いして映画館に入れてもらった話を語るとき、映画を観て愉しかったという話よりも、手をつないで実の親子のようにして映画館に入ったという話をしているときの方がずっと嬉しそうな顔をしている。子どもの頃に映画館によく行っていたのは、映画を観るためよりも父親代わりになってくれる人を探しに行っていたのかと思えるほどだ。

嬉しそうな顔と言え、祖母とずっと一緒にいたので祖母が歌っていた歌を覚えたという話をしてい

るときも、ラウ監督の父はとても嬉しそうな顔をしている。この映画にびとと一緒に歌を歌う場面が何度も出てくるように、同じ歌を歌うことは、長いあいだ一緒に過ごしたという親密さを示している。

この映画では「トラン・ブーラン」というラブソングがいくつかの異なるバージョンで流れる。これは現在のマレーシア国歌のもととなった曲で、マレーシアに馴染みがある人は、この曲を聞くとマレーシア国歌を思い浮かべるだろう。映画のオープニングとエンディングにこの歌が流れるということは、国歌で始まって国歌で終わっているという意味でとても「愛国的」な映画だ。ただし、そこでかけられているのは現在のマレーシア国歌ではなく、ラブソング・バージョンである。「国歌」をラブソング・バージョンでかけたことはマレーシアの映像検閲官の気持ちを逆なでしたことだろう。しかし、異なるバージョンの「国歌」が流れることで、国を想う気持ちは同じでも国を愛する方法は人それぞれでよく、それでもみなマレーシアの国民だというメッセージが伝わってくる。

このこと背景には、国民の多数派と同じ考えでないと正真正銘の国民として認められないのかという問いがある。この問いに関連して、映画の最後で、監督の父がゴム林の中で「自分はいまどこにいるのかわからない」と言う場面がある。実際には、かつて自分が育った場所の様子がすっかり変わってしまって今どこにいるのかわからないほどだという意味である。しかしこの映画の文脈に照らせば、自分がどの国に思いを寄せればいいのかかわからないという意味にも受け取れる。

### 「一途」で「孤独」なマラヤ共産党員の姿

ラウ監督の祖父は家族を蔑ろにしてマラヤの解放の夢に賭けたが、マラヤ（およびそれを引き継ぐマレーシア）の国や社会が祖父たちの思いを受け止めなかったため、その子であるラウ監督の父の世代は、自分がマレーシアで正真正銘の国民扱いされていると思えず、マレーシアにいても居場所がわからないと感じている。

それでは、その子、つまりラウ監督の世代はどうか。マレーシアにいても自分の居場所がわからないと言う父親と違い、ラウ監督は台湾に活動の拠点を置いている。もはやマレーシアには自分の居場所は

はないと見切りをつけて、マレーシアから外に出てしまったということだろうか。

このことを考えるため、もう一度、この映画で繰り返し流れる歌に注意してみたい。冒頭の「トラン・ブーラン」が流れる場面で、明かりのようなものを高く掲げている人たちが映る。亡くなった人を弔う提灯のようだ。革命のために斃れた人たちへの弔いの物語の幕開けを予感させる映像だが、空に高く月が上がっていくようにも見える。

月と言えば、エンディングで流れるハワイアン・バージョンの「マムラ・ムーン」(マムラの月)の歌詞は、恋人に去られた私に残されたのは月のほかに何もなくて孤独だけれど、一途な私のもとにまた恋人が戻ってくる予感がするという内容だ。「一途な私」は、この映画で紹介されたような、マラヤの革命と独立という理想に身を投じたびとと重なる。つまり、今はマレーシアの国や社会から引き離されて孤独な思いをしていますが、王明恵の両親が文革時代に批判されたけれど後に名誉が回復されたように、マレーシアの国と社会にまた迎え入れられる日が来るはずだという意味が込められているように感じられる。

映画や歌に月が出てくるときは、他に何もいないという孤独の表現として使われることも少なくない。しかし、月に他の意味を読み解くこともできる。月は空に毎晚上ってくる。月を見ているあなたが1人ぼっちだとしても、どこか他の場所で、他の人も同じ月を見ているはずだ。だから、空に月が出る限り、世界のどこかにあなたと同じ月を見ている人がいるし、月を見ながらあなたのことを思っている人もきっといるはずだ。

『不即不離』では、マラヤ共産党の元ゲリラ兵がカメラに向かって「今の若者たちのことを我が子のようにだと思って見ている」と言う。この発言は、この映画を見ている今の若い人たちに向けられた言葉のようでもあるが、直接的にはカメラを向けているラウ監督に向けられた言葉だ。ラウ監督が自分を元ゲリラ兵の子と位置づけることで、間接的に、かつてマラヤの解放のために勇敢に戦った人たちの子どもであり、今はマレーシア内外の各地にいる人たちの子どもであると自分を位置づけている。ラウ監督はマレーシアには自分の居場所はないと見切りをつけてマレーシアから出て行ってしまったのかという先の

問いに照らせば、マレーシアの中にいるか外にいるかは重要な問題ではないのだというラウ監督の思いが伝わってくるように感じられる。

#### 4. 父子関係のドラマからみる 映画に込められたメッセージ

改めて、映画は1つの作品に異なるメッセージを込めることができるメディアである。制作者が意図的に込めたメッセージもあれば、制作された時代や地域などの影響を受けて無意識のうちに織り込まれたメッセージもある。そのため映画には、中心的なメッセージを受け止めて愉しむことに加えて、それ以外のメッセージを読み解くという愉しみもある。

東南アジアの華人映画の読み解きのポイントの1つに親子関係、特に父から子に受け継がれるものがある。父子関係に目を向けることで、別の主人公によるもう一つの物語が立ち上がることもある。以下では、父と子の関係という観点から『不即不離』と『夕霧花園』に秘められたもう1つの絵図を読み解きながら、この2つの作品をさらに愉しむことにしよう。

##### 子を守らない親と共産党への嫌悪——『不即不離』

『不即不離』は、ラウ監督の祖父の話から語り起こし、過去のマラヤ共産党の活動と元黨員たちの今日に至る状況を示すことで、祖国のために戦ったにもかかわらず祖国から見捨てられたままになっている人たちに寄り添った作品である。そのはじめは、自分と父の関係が疎遠であるというラウ監督の思いだった。この思いにはどのように決着がつけられたのか。

作品中でラウ監督の父に関するエピソードがいくつか語られる。1つは犬のエピソードで、ラウ監督が小さい子どもだったころ、ラウ監督が犬が好きだと聞いた父がどこかから犬を連れ帰ってきたことがあった。どこで見つけたのかと尋ねられた父は、「よその家」と涼しい顔で答えたという。そのエピソードが挿入された意味は想像するしかないが、ラウ監督の父のとばけた人柄を示すエピソードになっている。

しかし考えてみると、野良犬を拾ってきたのではないということは、その犬には家があり、もしかしたら親犬がいたかもしれない。少なくとも親代わりの飼い主がいたはずである。突然親から引き離され

て別の家で育てられることになっても気にしないと思ったのだろうか。

もう1つ、ラウ監督の父が小さな子だったころ、近所の悪ガキたちに虐められてゴム園の中を逃げて行って迷子になったというエピソードがある。たまたま通りかかった優しい人が家まで送り届けてくれたが、そうでなければ家に帰ってこれなかったかもしれない。そう言われたラウ監督の父は、照れ隠しなのか、何か言うでもなく気にしない様子を見せている。

先に見たように、これはラウ監督の父が祖母を慕っていたことを示すエピソードとして理解できる。しかし、子犬を拾ってきたエピソードとあわせて考えると、ラウ監督の父は親と別れて暮らすことになってもかまわなかったのかとラウ監督が皮肉交じりに問いかけているようにも見える。

子は親から引き離されても親を忘れて育つだろうという話は、作品中でマラヤ共産党員たちが自分たちの赤ちゃんを養子に出したエピソードを思い出させる。ゲリラ戦の最中だったため、あるいは中国に追放になる直前だったため、自分の子の将来を考えて泣く泣く他人に託した。何年も経ってから再会したけれど自分のことを覚えていなかったと精一杯の元気を見せながら語る元黨員の姿は、自分の子を手放さざるを得なかった人たちに対する同情を誘う。

元黨員たちが自分の子を手放さなければならなかったことは、自分や家族のことを犠牲にしても国や民族のための戦いに身を投じた結果であり、その目的は利己主義の対極にあるものだったと理解できる。ただし、見方を変えれば、戦いに身を投じたのは自分で決めた道であり、他人に強制されたわけではないし、戦いに身を投じなかった人もいた。したがってその結果は自分で負うべきだという考え方もありうる。

さらに、マラヤ共産党がマラヤ解放を掲げてゲリラ戦を戦った結果として、華人はマラヤで生まれ育っても結局は中国のために戦う人びとであり、もし中国とマレーシアが戦うことがあればマレーシアを裏切って中国側につく人びとであるという疑いを生じさせたという見方もありうる。さらに穿った見方をすれば、独立して60年が過ぎても華人がマレーシアで二等国民扱いを受け続けているのも元をたど

ればマラヤ共産党が武装闘争を行ったためではないかという恨み言も聞こえてきそうである。

ラウ監督は、ゲリラ戦に参加しなかったら今頃は教師になっていたかもしれないという葉瑞清に、自分の人生は自分で選んだ結果だから後悔していないと言わせている。祖国のために戦ったのに祖国から追放されたのは理不尽だと憤る言いはよく理解できるが、その後ろから、強がっていても本心では後悔しているのではないかとラウ監督の心の声が聞こえてくる気がする。

一族の中で抗日運動に参加したのは自分だけだと誇らしげに語る張平は、家族・親戚はみなマレーシアで暮らしており、自分だけが中国に追放されて、毎晩マレーシアの夢を見るほどマレーシアに焦がれていると言う。いつかマレーシアへの帰還が認められて家族と再会できることを願わずにいられないが、その後ろから、それを選んだのは自分ではないのかというラウ監督の心の声が聞こえてくる気がする。

ラウ監督は、祖父に対して、あなたはマラヤ解放を夢見て家族を捨てて戦いに身を投じたけれど、その子である父はどの土地の夢を見ればいいのかと問いかける。祖父が殺された実家のそばにはゴム園が広がっており、そこには元黨員たちの霊がまだ漂っていると噂される。そこで祖父に対して問いかけたラウ監督の言葉は他の元黨員たちの霊にも向けられている。

このことを踏まえて、マレーシアに帰りたい思いが募って毎晩マレーシアの夢を見ているという張平の姿を見ると、あなたたちはマラヤの夢のために戦いに身を投じたと言うけれど、その結果として今では毎晩マレーシアの夢を見ているのだから、願いがかなったのではないですかという皮肉が込められたラウ監督の心の声が聞こえてくる気がする。

映画の冒頭は、留学先で仕事をするようになったので父とは9年間も音信不通だったというラウ監督の独白から始まる。これは自分が親に連絡を取ろうとしない親不孝な息子だと告白しているようにも受け止められるが、外国で一人暮らししている息子のことを父は少しも気にかけてくれなかったという恨み言とも理解できる。

『不即不離』は、マラヤ共産党員が我が身を犠牲にしながら祖国のための戦いに身を投じたにもかかわらず祖国から追放されたという運命に同情して寄り

添い、そのような闘士たちの1人だった祖父が家族と疎遠だったことを理解して受け止めることができるようになり、その祖父の子である父が家族と疎遠であることも受け止められるようになったというラウ監督の心情の変化の物語である。ただし、その物語の裏側に、たとえどのような事情があろうとも、自分の子を守り育てることを放棄した親たちに対する冷徹な眼差しと、そのような人たちの集まりであるマラヤ共産党に対する嫌悪がびったりと張り付いている。国や民族のことに思いを巡らせるならばマラヤ共産党員たちに寄り添う物語になるが、自分や家族の物語はそれと相いれない場合もある。集合的な物語と個人の物語が矛盾するとき、無理にどちらか一方に揃えることをせず、どちらも盛り込んだ物語を提示したことはラウ監督の誠実さと公正さの表れである。

### 父の無念を晴らしたい思い——『夕霧花園』

戦時中の物語ではしばしば父子関係がドラマを形作る。戦争は国どうしや民族どうしの対立であり、父とは自分の民族を代表する存在であるため、敵対する国や民族の相手と親密な関係になることが、父（およびそれに代表される自民族）への裏切りになるという葛藤がドラマを生むためである。

第二次世界大戦の日本占領期のマラヤが舞台である『パロー』<sup>12)</sup>では、日本軍の憲兵になったマレー人男性のアフマドが華人女性のシウランと親密になる。シウランの父はマラヤ共産党の地区幹部で、シウランは父の指示で日本側の情報を探るためにアフマドに接近するが、しだいにアフマドに恋愛感情を抱くようになり、父の指示と恋愛感情の間で引き裂かれる。戦後、シウランは個人的な恋愛感情のために対日協力者のアフマドと通じていたとマラヤ共産党から糾弾される<sup>13)</sup>。

『夕霧花園』では、妹を殺した日本軍に恨みを抱くユンリンは、元皇室庭師の日本人男性で日本を体現しているかのような存在である有朋に心惹かれ、それから35年を経て、かつて個人的な感情のために

12) 原題Paloh、アドマン・サレー監督、2003年。

13) アフマドとシウランの親密な関係の証拠として示されたのは2人が一緒に撮った写真だった。後にヤスミン・アフマドはこのエピソードを半捻りしてマレー人少女と華人少年の恋愛物語『細い目』に取り入れた。『パロー』と『細い目』については[山本2019]の第3章を参照。

日本のスパイに通じていたという疑いをかけられる。その限りでは『パロー』に通じる部分があるものの、『夕霧花園』ではユンリンにも有朋にも父と子の葛藤は見られない。

1951年にユンリンがマグナスを訪ねたときにマグナスがユンリンの父の話をしており、その様子から、おそらくマグナスはユンリンの父の知り合いで、ユンリンの父は健在であり、マラヤ共産党と対立する立場にいるらしいことがうかがえる。しかしユンリンの父が言及されるのはそれ限りで、ユンリンの行動には全く関わってこない。妹を日本軍に殺されたユンリンは日本人に強い恨みの感情を抱いているが、そのことが有朋への恋心との間で大きな葛藤を生じることはない様子である。有朋は妹の死に直接関わったわけではないし、後に連邦裁判所の判事候補になるまでキャリアを上り詰めるユンリンは自分の人生を自分で決定できる女性として描かれているということもあるが、それを差し引いてもユンリンと有朋の間には葛藤の気落ちがほとんど見られず、『パロー』などの他の映画と比べて際立っている。

ただし、『夕霧花園』に父子関係が登場しないわけではない。マグナスとフレドリックは父子の関係にある。

フレドリックは終戦直後(1951年)に父マグナスをマラヤ共産党員に殺された。それを手引きしたのはアチョンだった。アチョンは有朋の身のまわりの世話のために雇われていたが、弟がマラヤ共産党員で、有朋やマグナスの情報を弟に流していた。マグナスを殺したのはアチョンの弟たちであり、アチョンが直接手を下したわけではないが、弟たちに情報を流して屋敷に引き入れたアチョンはマグナスの死に間接的ながら責任を負っている。

マグナスが殺された後、有朋はジャングルに姿を消した。アチョンは雇い主を失ったが、フレドリックはアチョンを使用人として雇い、屋敷に住まわせて有朋の家の手入れを続けさせた。35年ぶりにフレドリックの屋敷を訪ねたユンリンは、そこでアチョンが雇われていることを知り、フレドリックに「優しいのね」と言う。間接的ながら自分の父の死の原因を作ったアチョンを家に置いて給料まで払っていることに対し、ユンリンは理解できないという顔をする。

フレドリックはなぜアチョンを雇い続けているの

か。親しみやすい見た目をしているからとあって、フレドリックは優しくて気前がいい人ということではない。父の無念を晴らしたいという強い思いのために違いない。ただし、父の死の原因を作ったマラヤ共産党員を殺したところで父の無念を晴らしたことはならない。父が夢みていたことを実現させることが父の無念を晴らすことで、それが子である自分の役割だと考えているのだろう。

### 復讐で無念を晴らすことができるかという問い

それではマグナスの夢とは何か。マラヤ共産党員に襲われる可能性がありながらもマグナスがキャメロン高原での暮らしを続けていた理由の1つは、山下財宝と呼ばれる日本軍の隠し財宝を探すことだった。日本軍がマラヤの山奥に隠したまま終戦を迎え、今も山奥にそのまま眠っているという噂がある。カフェでフレドリックがユンリンに話したように、マグナスは毎週のように山に入っては財宝探しをしていた。マグナスが変わり者の有朋と交友関係を結んでいたのも、山下財宝のありかについて何か情報が得られるかもしれないと期待してのことだったかもしれない。カフェでフレドリックの話聞いていたアチョンがその話を弟に伝え、アチョンの弟が財宝のありかを聞き出そうとして有朋たちを監禁し、混乱の中でマグナスが撃たれて命を落としたのだった。

広大な山の中に隠されている財宝を探し出すには助けが要る。ユンリンが最初にマグナスの屋敷を訪れたとき、籐の籠を背負った人たちが屋敷から去っていくのが見える。マグナスが先住諸族から森林産品を買い、そのついでに森の情報を尋ねていたのではないだろうか。また、地元の華人社会ともうまく付き合っておく必要がある。マグナスとエミリーの仲睦まじい様子を見れば、エミリーとの結婚は華人女性を妻にするためという政略結婚ではないとわかるが、華人女性と結婚できたのは地元の華人コミュニティと良好な関係にあったことを意味している。

父が殺された忌まわしい思い出がある屋敷を手放すことなく、父の死の遠因を作ったアチョンを雇い続け、有朋の家の手入れを続けさせてきたのは、たとえ何年かかろうともどのような思いをしようとも財宝を探し出すというフレドリックの執念がなせるものだろう。むしろそれは財宝で一儲けしたいという

ことではなく、父が文字通り命を懸けた財宝探しを亡き父にかわって実現させるという固い決意のためである。

その結果、有朋にお礼を言いたいという尼僧が有朋の家を訪ねてきたし、ユンリンも屋敷を訪ねてきた。それぞれがもたらす情報は断片的なもので、財宝のありかとは関係ないように見えるが、それらが組み合わせられることで財宝のありかが示される。マグナスとフレドリックの二代にわたる父子の物語はようやく結末を迎える。

フレドリックは父の無念を晴らすために残りの人生を捧げた。その方法は、父が道半ばで斃れた夢を実現することであり、そのため父の死に関わった相手とも手を結んだ。これは、親しい人が無念の死を遂げたとき、その死に関わった人に復讐することで無念を晴らすことができるのかという問いに対するフレドリックの答えになっている。

これはユンリンが突き付けられた問いでもある。日本軍に妹が殺された無念さは、日本軍の戦犯たちの死刑執行に立ち会ってその死を見届けても晴れることがなく、それから30年以上経ってもユンリンは妹の亡骸を探し続けている。

戦犯の小林守が死刑を執行される直前、日本の家族宛ての手紙をユンリンに託した。ユンリンは、他人の家族を奪うという非人間的なことをしておきながら死を目の前に自分の家族に人間性を見せようとしていると憤り、その手紙を森の中で捨ててしまう。それを拾った有朋から手紙を渡されても、投函することなく35年間も持ち続けた。その手紙をフレドリックに渡して投函してほしいと頼んだことは、35年の時を経て小林の人間性を受け入れたことを意味している。フレドリック的な死者への向き合い方がユンリン的な死者への向き合い方に影響を及ぼしたのである。父子関係に目を向けると『夕霧花園』はフレドリックを主人公とする物語として立ち現れる<sup>14)</sup>。

映画は国民的・民族的な悲劇の記憶を語るとともに、

そこに収まり切らない個別の記憶を織り込むこともできる。それを読み解く方法は、作品の内容を理解した上で、観客が自身の関心に照らしてそれぞれの作品を深掘りすることである。制作者と観客の共同作業の結果として、観客ごとに異なる深掘りが立ち現れる。今日では個人が映画の感想を公表しやすくなっており、それぞれの深掘りが共有されることで集合的な記憶が書き換えられていく契機の1つとなるものと思われる。

## 参考文献

- 林博史 1993 「マレー半島における日本軍慰安所について」『自然・人間・社会』(関東学院大学経済学部一般教育論集) 第15号。
- 山本博之編著 2019 『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界——人とその作品、継承者たち』(シリーズ「混成アジア映画の海」1)、英明企画編集。
- 山本博之 2021 「「金のユリ」によって引き裂かれた想いが35年の時を経て届く」『夕霧花園』劇場用パンフレット。

14) 小説版『夕霧花園』では、マグナスはアフリカーナーで、20歳のときにボーア戦争に参加してイギリス人に捕らえられて捕虜収容所に入れられたという背景が語られる。46年の時経てもイギリス人に対して複雑な思いを抱いており、ユンリンの日本人に対する複雑な感情と重ねて描かれる。小説版と比べることでマグナスとフレドリックの父子関係の物語がより深く理解できる。なお、小説版『夕霧花園』は彩流社より日本語訳の刊行が予定されている。